

常任顧問吉沢長人氏勲四等瑞宝章を受章

「吉沢長人氏の叙勲受章を祝う会」事務局実行委員会

「祝う会」に 300 人が集う

(財)日本植物調節剤研究協会常任顧問の吉沢長人氏が、平成5年春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章され、晴れの栄誉に輝やいた。

吉沢さんは、過去にも、昭和56年10月第1回科学技術振興功績者として、科学技術庁長官賞を受与されている。さらに、昭和60年秋には、藍綬褒章を受章されており、除草剤等の新技術開発と普及、つまり科学分野などの事業で公益に寄与したことにより、その業績が高く評価され、讃えられている。



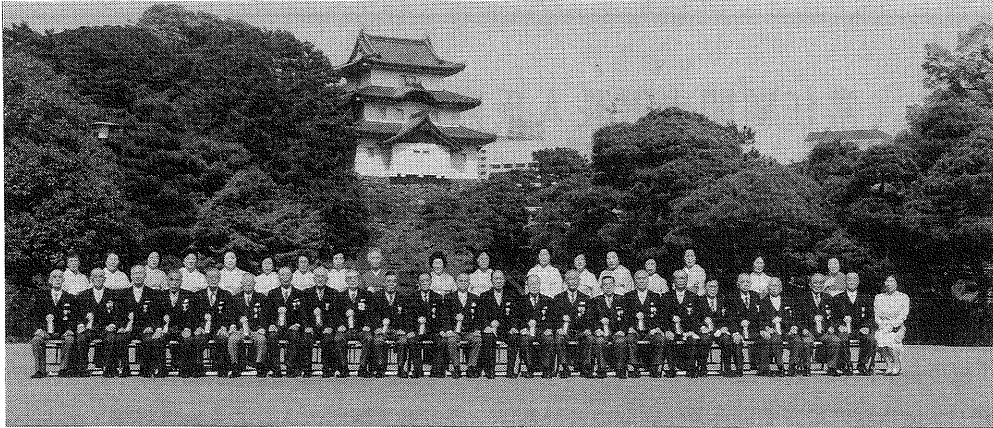
叙勲を受けられた吉沢夫妻（皇居で）

今回の叙勲は、農林水産省の平成5年春勲章受章者名簿にみられる「功績概要」のとおり、「多年農林水産行政に従事し、関係団体の要職にあつて、組織の育成強化に尽力するとともに、農薬の開発普及に取組み、農業の振興に寄与した——農業振興功労」によるものである。

吉沢さんは、鋭い先見性と力強い実行力、卓越した指導力を発揮して、雑草防除の新技術開発に、自ら先頭に立って取組み、数々の金字塔を打ち建ててきた、いわば、わが国の除草剤の歴史をつくってきた人、と云って決して過言ではあるまい。除草剤関係者は勿論、広く農業全般にとっても誇り高い今回の叙勲であった。

「吉沢長人氏の叙勲受章を祝う会」が、受章から1カ月経った6月28日(月)18時から、虎ノ門パストラル「葵の間」で盛大に開催された。その盛況を振り返ってみると、その日は梅雨の中休みというか、連日雨でぬりつぶされていた梅雨空が、この日だけは上がって、日中は薄陽がさす天与の幸運にも恵まれ、定刻前に会場は300を超す人であふれる状態となった。

この祝う会は、植調協会の理事のなかの13人の方が発起人会をつくり、早川 充氏（日産化学工業㈱専務理事）を代表発起人に立て計画され、その下に植調協会と会社の担当者による実行委員会が結成されて実行に移されたものである。



皇居で記念撮影（向って右から10人目が吉沢氏、後方が夫人）

会場には、農林水産省、大学、農業団体、農業業界、報道関係等の幹部から若い層に至るまで関係者多数が集い、吉沢さんのこれまでの幅広い人のつながりをつぶさに物語っていた。

会の進行は、植調協会の小澤常務理事（発起人）によって進められた。まず、吉沢さん夫妻が満場の拍手によって迎えられ、司会の小澤常務理事の開会の辞によって祝う会の幕が切っておとされた。最初に、早川発起人代表から、吉沢さんが勲四等瑞宝章を受章されたことの報告と、受章にいたるまでの数々の功績が披露され、これも夫人の蔭の支えがあったればこそと、夫人の蔭の功労に対しても叙勲の受章が讃えられた。

次いで来賓3人から祝辞が述べられた。トップの高橋農林水産省農蚕園芸局長からは、優れた吉沢さんの個性をユーモアを混じえて讃え、3つの大きな功績を挙げて祝意が述べられた。

かわって、小平農薬工業会会長からは、「同郷の先輩として誇りに思う。吉沢さんの足跡は、農業業界の貴重な先訓として大切に守っていく」と、業界代表者の立場からの喜びと祝辞が述べられた。しんがりを勤められた戸部東大名誉教授は、「吉沢さんの功績は、まさに勲一等

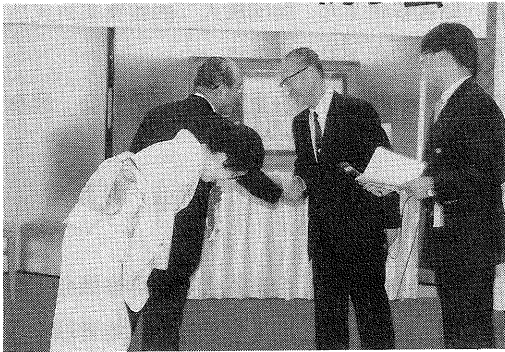
に価するもの」と賞讃された。おだやかな中にもウィットに富んだ祝辞であった。

続いて、吉沢さん夫妻に記念品・花束贈呈が行われた。出席者全員に代って櫛淵植調協会会長から、「おめでとうございます。みなさんからの記念品で、海外旅行券です」と、言葉を添え目録が手渡された。また夫人には、同協会職員の関百合子さんから、「おめでとうございます」と、花束が贈られ、満場拍手の嵐となった。

謝辞に移り、受章者吉沢さんから祝う会の開催に感謝が述べられ、「叙勲受章の栄誉は、皆さんの長年にわたるご支援の賜であり感激の極み」と謝意が表明され、半生にわたる雑草防除との戦いの来し方が話された後、「この栄誉は、共に除草剤の開発普及に係わった関係者全体への栄誉であると信じている」と、心からの感謝が述べられた。

このあと、貝沼農林水産省農林水産技術会議事務局長の発声で祝盃が上げられ、祝宴に移った。その際貝沼局長から、「以前から“天皇”の異名を耳にしていたが、吉沢さん執筆の“除草剤開発の想い出”を読んだり、叙勲にいたる功績調書を拝見して、凡俗にはとうてい及ばない傑物であることを知った。植調協会の今日を

在らしめ、除草剤等の目をみはる発展をみると、私は世俗の誇張した異名を是と感じた。今後、農業技術の進歩のため一層のご健闘をお祈りする」むねの祝意が述べられた。



榊刈会長から記念品の贈呈を受ける吉沢氏



乾杯の音頭をとる貝沼農林水産技術会議事務局長

パーティーの席上で、吉沢さんとは旧知の、雑草防除の権威者で宇都宮大学名誉教授竹松哲夫氏と、農林省時代からの旧友である渡辺誠治氏（農業生産工学研究会専務理事）の2人から、長い交遊がなくしては語れない、親しみのこもったスピーチがなされた。

寄せられた祝電は、政・官・業界、関係団体、協会内外関係者から200通を超した。その一部が則武研究所長によって披露された。

明るく、賑やかなムードに、いつの間にか、アッと言う間に2時間の祝宴が経過した。

閉会の締めとなった。発起人を代表して、音頭をとったのは渋谷正弘氏（日本農薬㈱専務取

締役）。渋谷さんの軽妙酒脱な話術に、しばし場内は笑いの渦が巻いたが、最後は力強い万歳三唱で美事に締められた。

明るいざわめきが静まるのを待って、吉沢さん夫妻が満場の拍手に見送られ、にこやかに退場されお開きとなった。

出席者から、「吉沢さんの人柄がにじみ出た、さわやかで、華のある、本当によい祝宴でした」と聞かされ、梅雨空に青天をみた心持ちであった。

吉沢長人氏の主な功績

1. 除草剤の研究開発及び公的試験体制を整備し、昭和29年には、農林省と都道府県試験研究機関を結合させた「都道府県連絡試験」を実現。除草剤等の薬効、薬害試験を飛躍的に発展せしめる礎を築いた。
2. 昭和39年11月、(財)日本植物調節剤研究協会を設立。爾来26年余にわたって実質的な運営の責任者として協会運営に当たった。この間組織の整備拡充を図るとともに、除草剤の新技術開発とその普及に独創的な事業運営を貫き、国、業界双方から、除草剤等の公的試験研究機関として高い信頼を築いた。
3. 雑草防除の新技術——土壌混和处理法・茎葉兼土壌処理法・水田除草剤の一発処理法等を確立。これに適合した優れた数多くの有効除草剤を開発したほか、多年生雑草防除剤・畑地用細粒剤の開発にいたるまで、心血を注ぎ、より高い安全性、省力、低コストを基本とした除草剤の創出に先駆的役割を果たし、除草労力の大幅削減など農業の近代化に尽した。
4. 除草剤等の今後進むべき方向として、環境保全問題など社会的要請を踏まえた新規剤、

とくに水田除草剤——ジャンボ剤、抑草剤の開発を強力に推進し、その早期実用化をうながし、各方面から、画期的技術の商品化が期待されている。

5. ブラジル国における除草剤等の試験研究機関を設立。その運営に財政・人的両面にわたる支援を行っている。このほか、中華人民共和国との間に、雑草防除に関する研修生の受け入れや技術交流事業を創設するなど、わが国のなすべき国際貢献に、民間の立場から技術支援をもって国益に寄与した。

吉沢長人氏の主な経歴

自 昭和16年7月 農林省（農政局農産課・農業改良局技術研究部・振興局研究部企画官・農林水産技術会議事務局研究調整官補佐）
 至 昭和40年1月
 自 昭和40年1月 財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部長
 自 昭和42年6月 同協会 事務局長
 至 昭和44年3月
 自 昭和44年3月 同協会 常務理事
 至 昭和52年5月
 自 昭和52年5月 同協会 専務理事
 至 昭和62年12月
 自 昭和62年12月 同協会 会長
 至 平成2年12月
 自 平成2年12月 同協会 常任顧問
 至 現在

その他法律等に基づく委員歴

自 昭和47年1月 農薬残留対策調査技術委員
 至 昭和51年3月 会技術専門委員（環境庁）

民間団体等歴

自 昭和37年4月 社団法人 農林水産航空協会
 至 昭和41年3月 会 農林水産航空事業新分野開発委員
 自 昭和47年7月 財団法人 残留農薬研究所
 至 昭和63年1月 評議員
 自 昭和47年11月 農業生産工学研究会 理事
 至 現在
 自 昭和47年12月 新稲作研究会 理事
 至 現在
 自 昭和49年4月 全日本化学除草協議会 顧問
 至 現在 問（現全日本緑地管理協議会）
 自 昭和51年4月 日本雑草学会 評議員
 至 平成4年3月
 自 昭和56年4月 日本農薬学会 評議員
 至 平成3年3月
 自 平成3年4月 日本農薬学会 顧問
 至 現在
 自 昭和57年10月 I S O農薬部会 委員
 至 昭和62年7月
 自 昭和59年4月 植物化学調節学会 評議員
 至 昭和62年3月
 自 昭和62年4月 植物化学調節学会 顧問
 至 現在
 自 昭和63年4月 財団法人 残留農薬研究所
 至 平成3年3月 理事
 自 昭和63年5月 社団法人 日本植物防疫協会
 至 平成3年5月 会 理事
 自 平成元年8月 緑の安全推進協会 理事
 至 平成3年5月

受章歴

昭和46年12月 社団法人 農林水産航空協会会長から感謝状（農林水産航空事

- 業の発展に貢献)
- 昭和54年5月 指定試験事業50年史刊行記念協賛会代表から感謝状(指定試験事業の発展に貢献)
- 昭和56年10月 科学技術庁長官から科学技術振興功績者表彰(水田における除草剤使用技術の普及啓発)
- 昭和59年6月 全日本化学除草協議会功労者表彰(非農耕地における除草剤の普及)
- 昭和60年11月 藍綬褒章(農業振興功労)
- 平成3年11月 財団法人 日本植物調節剤研究協会会長から感謝状(協会の設立から一貫して協会の育成発展に貢献)
- 平成5年4月 勲四等瑞宝章

関係者の挨拶、祝辞(要旨)

早川発起人代表の挨拶



ただ今ご紹介いただきました早川でございます。甚だ僭越でございますが、植調協会の理事の一員と致しまして、お目出たい本席の発起人代表を仰せつかり、相勤めさせて戴いております。

本日は、皆様には大変御多用にも拘らずお運

び戴き誠に有難うございます。発起人を代表いたしまして心から厚く御礼申し上げます。特に御来賓の皆様には公務御多忙の中を御来駕いただき重ねて御礼申し上げる次第であります。

既に御案内のように、このたびの叙勲で、財団法人日本植物調節剤研究協会 常任顧問の吉沢長人殿には栄誉ある勲四等瑞宝章を受章されました。昭和60年の藍綬褒章に続く栄誉であり、私共農業関係者にとりまして、この上ない喜びであり誇りとする所であります。

受章に到る吉沢さんの御経歴につきましては、本日皆様にお配りします御自身の筆になる「除草剤開発の思い出」にくわしく述べられておる所ありますが、簡単にふれさせて戴きます。

昭和16年に当時の農林省に入られ、農政局、農業改良局、農林水産技術会議事務局を経て、昭和40年、植調協会発足に伴い退官される迄の農林省在職中に、今日の指定試験事業の基礎や、国立農試に畑作部を新設されるなど、数々の業績を残されました。

特筆すべきは、昭和25年より「除草剤の利用」を担当される中で、全国の試験研究機関による連絡試験の基準を作られたことであります。これが吉沢さんと除草剤の出会いであり、同時にそれは日本農業における除草剤利用のはじまりでもありました。まさに除草剤の歴史は吉沢さんと共にあるとの感を深くするのであります。

更に、除草剤の組織的な利用開発には公益法人が必要とのお考えに到って、直接の担当官として、色々御苦勞の末、昭和39年、植調協会の設立となったのであります。

これを機に、吉沢さんは請われて協会に入り、爾来長年にわたり協会運営の実質的な責任者として重責を果して来られました。技術部長、事務局長、常務、専務理事、会長の要職を歴任さ

れ、平成2年、常任顧問に就いておられます。

この間の御業績をふり返りますと、吉沢さんの鋭い先見性、巾広い指導、実行力、そして又卓抜した経営手腕に感嘆するのであります。

雑草防除の合理化こそが、農業生産性の要であるとの信念にたって、次々に時代に応えるプロジェクトを進めて来られました。代表的なものをあげますと、土壌混和处理法、茎葉兼土壌処理法、そして一発処理法の開発と、何れも一時代を画する新利用技術となって広く普及を見た所であります。現在は更なる省力化のための1kg剤、ジャンボ剤の開発に鋭意取組まれております。この間環境問題への配慮、検討もなされて来たことは勿論であります。

こうしたプロジェクトを進めるに当っては、御自身みずから先頭に立って、私共を叱た勉励、強烈なる御指導を給って剤の開発につながったわけであります。

経営者としては設立時、4名でスタートした協会が現在では100名になんなんとする発展、業容の拡大を見ております。

研究所の新設、植調会館の新築、海外開発の基地としてブラジル植調の設置、又日中技術協力事業の創設等これ又大変な事業を成し遂げられております。

常に前を見すえ、チャレンジ精神に満ちた吉沢さんは将にサミュエルウルマンの詩「青春」の中にあると感じます。

終りになりましたが、吉沢さんがこうして今日の榮に浴されるに到るには正子夫人の力強い支えがあってこそと、奥様に対し心からのお喜びと敬意を表したいと存じます。

吉沢さんには何時迄も御元気で、職員の進むべき道を御教授下さることをお願い致します、と同時に、更に一層奥様孝行につとめられるこ

とと期待致しまして御挨拶とさせていただきます。

高橋農蚕園芸局長の祝辞

この度、吉沢さんには、長年の御苦労と多大な御功績が認められ、勲四等瑞宝章を受章されましたことを、心よりお慶び申し上げます。

また、氏を長年支えてこられた奥さんの内助の功に敬服する次第です。



吉沢氏の功績について申し上げると大きく分けて3つがあります。

1つめは、(財)日本植物調節剤研究協会の設立(昭和39年11月)とその運営に尽力されたことがあげられます。

つまり、除草剤、植物成長調整剤を農薬として登録申請する際の公的試験を適正な管理下で実施するために、植調協会を設立されるとともに、29年にわたって、その運営の中心的役割を果たされ、農薬行政の推進に貢献されました。

2つめは、新しい除草剤、植物成長調整剤の開発、利用技術の開発を推進され、我が国農業の近代化に貢献されたことがあげられます。

吉沢さんは、常に、農薬の高い安全性、農業生産の省力・低コスト化を基本として、自ら農薬による新たな除草技術を開発されるとともに、関係業界を指導、育成されました。

3つめは、国際協力を推進され、諸外国の農

業発展に貢献されたことがあげられます。

昭和59年にブラジル国に植調協会の試験研究機関を設立され、日本で開発した除草剤の海外での現地適用試験を行うと共に、現地での適正使用技術の啓蒙活動を実施されました。

また、昭和61年以降は、植調協会として中華人民共和国への技術支援に取り組み、研修生の受け入れ、雑草防除に関する技術交流会の開催等を実施されました。

以上のとおり、吉沢さんの我が国のみならず世界の農業の近代化に対する大きな貢献に対し、心強く思うと共に、改めて敬意を表する次第であります。最後に、吉沢氏の益々のご健康と、氏がこれまで育ててこられた植調協会の一層のご発展をお祈りして挨拶とさせていただきます。

小平農薬工業会会長の祝辞

本日、このように立派な業界の先達の方々が揃いの席に、僭越の極みでございますが、農薬工業会関係の皆様へ代り、私よりお祝辞を申し上げます。



先ずは、吉沢長人様には、晴れの勲四等受章、真におめでとうございます。奥様並びにご関係の皆様にも、心よりお慶び申し上げます。

さて、本日の受章は、吉沢さんの長年に亘る日本の農業への貢献、農薬産業の育成、特に除草剤の開発の功績が認められたものと思います。

私共農薬工業会関係者一同、我が事の様に嬉しく存じている次第です。

農薬工業会もこの5月に新年度を迎え、一同心を新たにしている所です。新年度の大きな課題は“安全”と“流通”で、この難問に対処する為に、夫々に特別委員会を組織しました。ご列席の皆様には、格別のお力添えを賜り度く、この席をお借りしてお願い申し上げます。

特に、安全広報問題は古くして新しく、高度の知恵と努力を要します。この為に、引き続き1億4千万円の予算を計上し、その重点を、新聞・雑誌・テレビなど、一般消費者向けにおくことに致しました。二三日中には、Y新聞にシリーズ第1号が、掲載されますのでご覧いただき存じます。

第1号の内容について、委員の方々の検討結果、農薬の果たした役割、特に除草剤の功績を訴える事になりました。除草剤は水田10a当り50hrの除草作業を2hrに短縮しました。日本の農業を省力化して、優れた労働力を各産業界に供給したわけです。除草剤の開発こそ、日本の高度成長を促し、今日の豊かな社会を作り上げた原動力である、ともいえましょう。この点を背景として、農薬の新しい安全広報活動を進めたいと考えておりますので、どうかご覧の上、ご批評下さる様お願い申し上げます。

さて、この日本の除草剤開発のセンターにあって、献身的に活動されてきたのが吉沢さんです。常に将来を見据え、実証的で、活力に溢れたご活躍ぶりには頭が下がります。溢れる泉のようなアイデア、理論的な考察、科学的な推進。視野が広くて、国際的にも事業を展開される。そして実行力が豊かで、スケールが大きい。実務的であると共に、ロマンに満ちている。そんなお仕事ぶりが、素晴らしい成果を挙げ、広く

社会に認められたものと存じます。

ところで、吉沢さんは信州のご出身です。この席にも同郷の人が何人かいらっしゃいますが、私もその一人です。何かと頭が上がらない思いが多いのですが、故郷の先輩としても誇りに思い、見倣いたいと存じております。

考えてみるほどに、吉沢さんの輝かしい足跡は、農薬業界の貴重な先訓だと思います。私共もその足跡を大切に守り、新しい業界の発展の為に、頑張っていく所存です。どうか、今後も変らぬご指導の程をお願い申し上げます。

終わりにになりましたが、吉沢さんには、本日の栄えある受章を機に、農薬業界の為に一段と大きくご活躍下さいますよう、祈念しております。ご健勝とご多幸を、心よりお祈り申し上げます。祝辞に代えさせていただきます。

戸荻東大名誉教授の祝辞



『吉沢さん、勲四等瑞宝章受章おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。この受章は本人の業績ですが、奥様の内助の功と言いますか、立派な家庭の在ることが大いに貢献していると思います。どなたに対しても、いつでも暖かく迎えられる家庭があればこそであります。奥様にも、合わせてお祝い申し上げます。』

戦後、日本農業の、特に雑草防除の面で省力化を果たした除草剤の役割は極めて大きいもの

です。これは皆さん充分にご承知のところであり、その先頭にたって進めた第一功労者が吉沢さんであることは、万人の認めることであり、まさに、勲一等であります。それが勲四等というのは民間人の叙勲は政治家や役人のそれと違って厳しい評価だからであります。しかし、考え方ひとつです。私達が小さいころ尊敬していたあの“野口英世博士”，あの方が戴いたのは“勲三等”だそうであります。としますと、勲四等は野口博士の業績に次ぐ立派なものに違いありません。このような評価に持ち込んでいただいた農水省関係官のご高配にも感謝し、この受章を大いに誇りにして、健康に留意してなお一層お努め頂きたいと思ひます』

宇大名誉教授竹松哲夫氏のスピーチ

この度は、吉沢さん・奥様栄えある叙勲おめでとうございます。

さて、私が吉沢さんに初めてお会いしたのは昭和25年、2,4-D普及会の二階でした。その頃、東大農芸化学の先生から2,4-D普及会に勤められた遠藤清蔵先生に紹介され、名刺を交換しました。それ以来44年間の長いつき合いです。

吉沢さんと私は同じ信州出身で、共に農学を学び、同じ年であり、戦争を体験していることからか、お互い色々のことを言わなくても簡単なやり取りでお互いの気持ちは通じてしまいます。只のいちども口論したことはありません。当時、弱い立場の私を考えてくれました。昭和33年頃の事でした。突然、吉沢さんが宇都宮大学を訪れ、私の研究室を見て、『何だ、ビニールハウスも無いのか』と言って、数日して組立式のビニールハウスを送ってきました。これが、昭和43年宇都宮大学に雑草防除研究施設（現雑

草科学研究センター)ができるまで私共の唯一のハウスであり、『吉沢ハウス』と名付けて研究に大活躍する場となった。



さて、話は変わりますが今から80年程前のある夜、『今夜、ゆっくり二人で飲もう』と言い出しました。本来、余り飲まない彼が大変珍しい事なんです。その夜、何軒か飲み歩いた頃『農林省をやめて、協会に出ることにした』とポツリと言われた。後は何も言わなかったのですが、私は『大変な決心であり、私には頼むよ』という意味にとれた。

当時、除草剤の研究をやっていた研究者は川田信一郎、宗像桂、笠原安夫、竹松哲夫、荒井正雄等で、吉沢さんが事務的な調整役をしていました。それらの人々のうち三人は既に亡く、一人は除草剤から離れ、今現役で働いているのは、私と吉沢さんの二人だけとなりました。まさに、生き残りであります。吉沢さんは、生来先見性と創造性に恵まれており、研究や組織のネットワーク造りの名人です。お蔭で日本の除草剤、植調剤研究組織は世界一となり研究開発も現在世界一と言われるまでになりました。

私は思う、もし吉沢さんがいなかったら日本の除草剤界は今日の発展した姿があったのだろうか？ 私はなかったと考えます。私は吉沢さんの先年の藍綬褒章、そして今回の叙勲を心から

嬉しく思います。どうか今後は健康に留意して、後進を育てながら大所高所からご活躍されるようお願い致します。

吉沢さん、奥様、本日は誠にありがとうございます。

渡辺農業生産工学研究会専務理事のスピーチ

吉沢さん、奥様この度の叙勲の栄誉を心からお祝い申し上げます。

私と吉沢さんとの出会いは、23年10月農林省（農業改良局技術研究部）に入省した時です。農業改良局は8月に新設され、技術研究部の職員は20名足らずでした。私は入って2、3日で庶務係から実験所事務室へ移りました。小島室長は部下の室員を机の前に集め、新人の私をご紹介して下さいました。それが吉沢さんとの出会いでした。



実験所事務室は、農産課が所管していた指定試験係の担当官が母体で、農事改良実験所として独立機関となったため、技術研究部で人容を強化して人事、予算、前渡支金と業務を一体的に行うための所帯でした。

吉沢さんは人事におられました。予算には野中、松田（栄）、野矢、河辺さんらがおられ、私は、その予算班に配置され、河辺さんの下で働くことになったのです。

吉沢さん、河辺さんはまだ独身でしたが、実

験所事務室の業務隊長で、吾々新参の雑魚^{ざとこ}とは一格も二格も違う上司であり、休暇をとるにもまず隊長の許可をとるのが先決でした。

私は、毎日が予算書のガリ切り、印刷と資料の読合せが仕事でした。何しろ資料の作成は限られた時間内にミスなく完成させることが必要で、泣きたいことや難儀な事の連続でした。

吉沢さんはご存じのように酒、タバコは殆んどたしなまれない方でしたが、私の隊長は人使いの荒い方でしたが、退所時には赤チョウチンに寄る楽しみがあって吾々雑魚^{ざとこ}をつれ、よくハシゴをしたものでした。

小島室長や野中さんなどは偉い人で、顔を見合わせた折には吾々雑魚^{ざとこ}には「困った事があればゆうて来い」と言っておられました。が直接話しはできず、若し用のある時は隊長を通さなければならず話の内容によっては隊長が駄目だの一言でおしまいでした。序列がきびしく整然としており、今日とは隔世の感がいたします。

2年半で私は病となり長期療養の身となったが、同僚や上司からの便りにより、吉沢さんも河辺さんも病で倒れた事を知らされました。1年余り休んだ後幸いにして復職すると、その間に農事改良実験所が国と県に移管され、実験所事務室の上司や同僚の大半は研究部と研究管理課に分れていました。私は研究管理課に席があったので再び河辺さんの下で働く事となった。吉沢さんは研究部に移動されて活発に仕事されておられました。元気なお姿に接し、病気が快癒し復職できたことを喜び合ったのでした。その後私は研究部の近藤企画官の下で稲作を担当することとなり、再び吉沢さんと一緒に部屋で仕事をする機会を得たのであります。

吉沢さんとの出会いから40余年、若かりし頃から今日まで、吉沢先輩には親身に優るお世話

になりました。今走馬灯のように頭の中を駆けめぐっております。心をこめて感謝の念で一杯です。

どうぞこれからも益々のご健勝を祈念いたします。

吉沢長人氏の謝辞

一言、謝辞を述べさせていただきます。

本日は、このような盛大な会を催していただき誠に有難うございます。また、公私共にお忙しい中をお運び頂きましたことを厚く御礼申し上げます。

高橋農蚕園芸局長、小平農業工業会会長、戸茆先生の御祝辞、身にあまる光栄でございます。

ここに謹んで感謝を申し上げる次第であります。



この4月29日、私が勲四等瑞宝章を頂くことになりましたが、今日まで大過なく過ごすことができ、その上この荣誉に浴することができたことは、偏に皆様の長年にわたる心からなる暖かいご支援の賜ものと存じます。この席をお借りいたしまして厚く厚く御礼申し上げます。

5月21日、農林水産省から叙勲の伝達を受け、皇居において天皇陛下に拝謁の栄を賜ってから早いもので1か月が過ぎた今、このように多勢の皆様にお祝いをして頂き、その上心のこもった記念品を頂戴し感謝の極みでございます。

私は信州の蓼科山と浅間山を望む風光明媚なところに生まれました。農家でしたので当然のこと農業の手伝いをしたものです。昔は今のよう勉強一点ばかりでなかったと思います。特に炎天下での田の草取りだけは、辛い仕事でありました。今もなお、私の脳裏に焼き付いております。

その後、縁あって農林省に入りました。昭和25年にアメリカより導入された水田除草剤 2,4-D の普及に携わることになり、それが私と除草剤との出会いであったと思います。

当時は、茎葉処理剤の 2,4-D, MCP, 昭和34年から土壌処理剤の PCP, しかし PCP が魚毒性の大きいことから、方々で問題になりそれにかわるものとして低魚毒性の除草剤、更には NIP, MO などの開発利用に携わって参ったわけであります。

その後、昭和40年1月に財団法人日本植物調節剤研究協会が発足致し、私は農林省を退職し移ることになりました。爾来、今日まで除草剤、生育調節剤の開発、利用研究に携わることになった次第であります。

私の半生、すなわち約45年間は雑草との戦いであった次第であります。今、ここに思えば、信州で四つん這いになった時から雑草防除の仕事が、私に与えられた天命でなかったか、と思うのであります。

協会に移ってからは、協会設立後の体制、研究所の設立、現地試験地の設立、試験方法の確立、それに伴う除草剤の利用開発、たとえば土壌混和除草剤、茎葉兼土壌処理剤、一発処理剤、畑作細粒剤、茎葉処理剤の速効化、除草剤散布の機械化など、今日、農業を行ううえで、最も重要なコストダウンをはかって参りました。

このようなことが走馬灯の如く、過ぎ去って

行きます。

これも、ここにご出席のみなさん始め関係各位のご指導、ご懇情なくしては得られぬものがあります。その意味からも、この栄誉は私一人のものでなく、除草剤、生育調節剤の開発普及に係わった関係者全体への栄誉であると信じております。

いま、わが国農業は、昨年農林水産省から出された、新農政プランに沿って展開される諸施策のもとで、活力ある農業、農村づくりが期待されておりますが、今後共農業の農業振興に果す役割は、その重要性においていさかも変わらないものと確信いたします。

豊かさ、ゆとりある生活が求められている21世紀にむけ、人の英知によって科学技術の革新的な進歩が図られるなかで、除草剤等の農業の分野でも、今日までの経験に立って新たな要請にもとづく画期的な発想が結実し、より安全で効果的な新剤、その利用技術の開発が一層発展的に推進されねばならないと考えます。

そこで、除草剤部門として考え、これから進む方向として、水田では一層省力的なジャンボ剤の利用開発、畦畔、道路ノリ面その他を考えた抑草剤の利用開発などを目標として、より利用効率を高めることに努力致しております。御期待を乞う次第であります。

さて、本日のこの感激は、私の終生忘れることのできないものであります。この栄光とご好意を肝に銘じ今後一層精進いたす所存でございますので、なにとぞ従前に変らぬご交誼を賜わりますよう伏してお願い申し上げます。

終りに臨みまして皆様のご健勝とお幸せをお祈り申し上げ、甚だ意を尽くせませんが、お礼のご挨拶にかえさせていただきます。

誠に有難うございました。